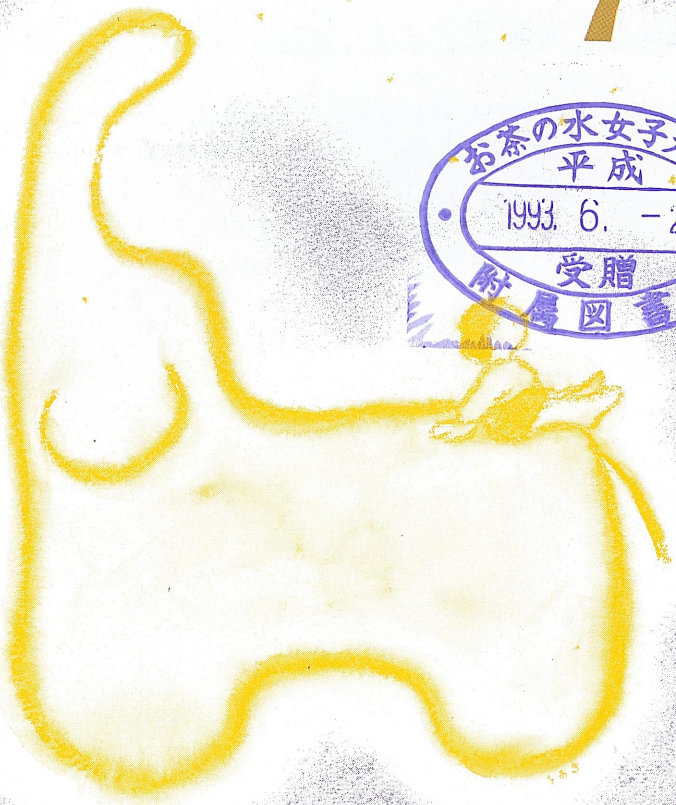
幼児の教育　第92巻　第7号　平成5年7月1日発行（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

1993 7

お茶の水女子大学
平成
1993. 6. -2
受贈
附属図書館



第92巻　第7号　日本幼稚園協会

楽しくもりつけ

保育給食

おいしくいただく

楽しくおいしい料理作りのために、温かい心のこもった料理の工夫をまとめた、安全で衛生的な食事を提供。

素材を100%生かした料理作りと健康な食事の取り方を中心に、おいしい料理作りのコツをまとめました。
新しいメニュー調理例、月別献立表、作り方、材料それぞれの調理ごとに一人当りの栄養価計算付き。料理作りのポイントがついていて、おいしい料理作りに役立ちます。
保育園での給食という事情を考えて、栄養価が計算されています。見やすいオールカラーページ。

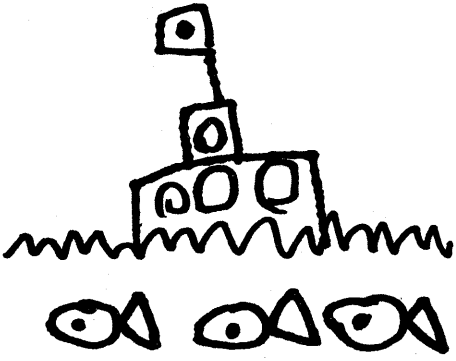
小林久子・野村迪代／著

B5判・184頁・定価3,800円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第92巻　第７号

幼児の教育

目次

——第九十二巻　第七号——

〈巻頭言〉保育と保育学の専門性を問う……森上　史朗…（4）

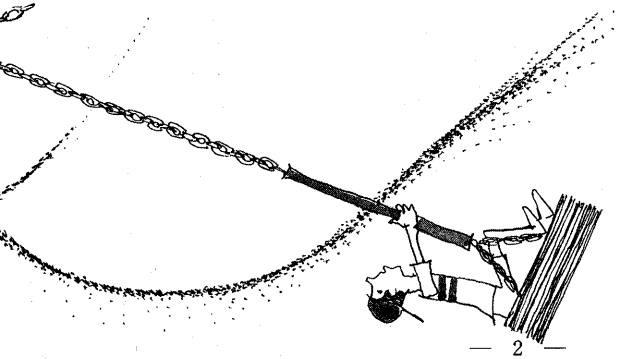
幼児期の輝きと揺らぎ……津守　真…（9）

今からまいて夏休みに咲かせるアサガオ……浅山　英一…（12）

子どもの少ない時代こそ幼児教育の見直しを…
次世代に向かって力をつける時が今！……渡辺　真一…（21）

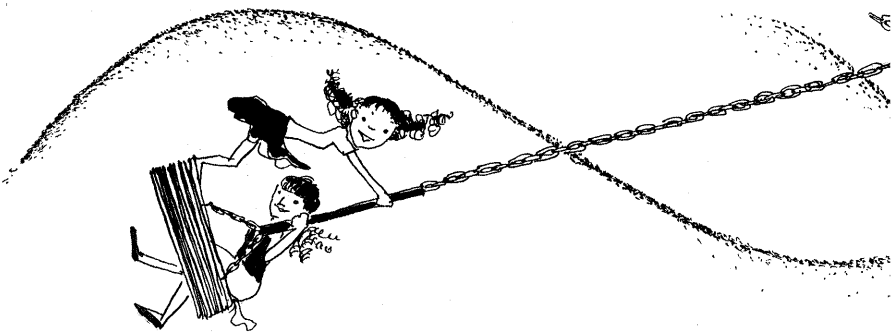
堀合先生に学ぶ(4)……立川多恵子…（30）

© 1993
日本幼稚園協会



菊池先生を思う……村田　修子…（38）
保育への視座(10)　若い保育者の方々へ……河邉　杲…（45）
公教育は家庭教育にどこまで関与するか(4)
　ありふれた生活を見直すことから……伊集院理子…（50）
ある日の育児日記から(31)……佐藤　和代…（56）
若いお母さんたちへ　弱い母親……杉本　裕子…（57）

表紙・紺野　千秋／扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／田代　和美
田中三保子・岩上　節子
編集部・大沢　啓子

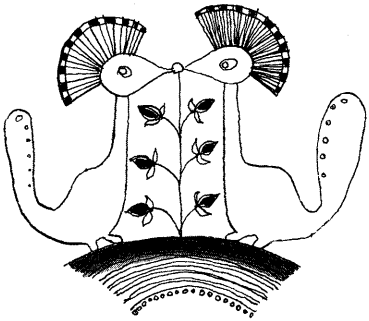


〈巻頭言〉

保育と保育学の専門性を問う

森上　史朗

私は、保育学は、幼稚園や保育園、家庭などで営まれている（或いは営まれてきた）保育という現象、ないしは行為の妥当性について、その判断の根拠を与える学問であると考えています。もちろん、その現象とか行為は広い意味であって、制度や歴史までも含むものとして捉えています。また判断の根拠となるものは、明確に意識化されたり、言語化されたものもあれば、実践者や研究者の中に暗黙に存在しているものもあります。それらは一般に保育の理論と呼ばれているものです。保育学では単に事実を提示するだけでなく、それが保育にとってどういう根拠にもとづき、どういう意味があるかというような、広い意味での保育の理論を根底に据えて検討することが求められて



いるのです。そうした点で、実践者にも保育学の勉強は必要であり、また、保育学は実践者と研究者の協同作業によって作り出されていくものだと考えます。

ところで、その〝保育学〟は、私は、心理学や教育学、社会学、医学などとは違った独自の存在意義をもつ学問であるべきだと考えています。もちろん、それらの学問と共通する側面を多くもっていることは否定できませんが、しかし、保育学がそれらのものの「借りもの」や「寄せ集め」にとどまっていては、いつもその下位に位置づけられたり、あるいは植民地的に扱われたりしてしまうでしょう。

事実、保育に関する学会では、それぞれの独自の学問分野では評価されないものまでが大手をふってまかり通っています。また、学会誌の審査などに当たっても、その分野の評価基準がそのままもちこまれて、「質の高さ」が問われたりしています。〝学際的〟といわれるシンポジウムに出てみても、視野が広がるどころか、それらの学問の悪しき部分に汚染されるのではないかと危機感を感ずることさえあります。そういった点から、今早急に、保育学の独自の存在意義と独自の性格を明確にしておくことが必要ではないかと思います。

臨床心理学者の河合隼雄氏は、学問に「男性の目」の優位なものと「女性の目」の優位なものとがあるといいます。「男性の目」は現象を見る時、対象を自分から切り離して、その部分だけを客観的に捉えようとします。これに対して「女性の目」は自他の未分化のままに、現象をまるごと主観の世界を尊重しつつ捉えようとします。また、「男性の目」は普遍化をめざし、「女性の目」は個別性を浮きたたせます。「男性の目」に傾斜

し易い学問分野に比べて、「女性の目」が優位な保育学、看護学、臨床心理学などの分野では、学問体系を構築しにくく、そのため、心理学や教育学、医学などの「借りもの」に甘んじてきましたが、それではいつまでも〝ほんもの〟になりません。自分たちの独自の立場を明確にする必要があります。

そのためにはどんなことが必要でしょうか。幾つかの要件の中から、今回は紙数の関係で一つだけとりあげてみます。それは実践と理論の関係の問い直しです。すなわち、保育の現実の営みは泥沼といってよいほどの複合性と不確実性の上になり立っていて、近代科学的な実践と理論の関係では捉えきれないような問題を含んでいます。たとえば、実践者の在りようが子どもに影響し、子どもの在りようが実践者に影響し、その循環で作り出される保育のまるごとの状況や、実践者の体で感じている体感、保育中とその後に働く思考様式、簡単に言語化できない雰囲気のようなものまでも抜け落ちないようにして追求していくことが必要でしょう。そうした点で研究者も〝高み〟からの観察ではなく、実践の中に入りこむ必要があるでしょうし、実践者にも混とんとしたものをそのままに終わらせない省察が必要とされるでしょう。そこに協同の作業の重要性が浮かび上がってくると思います。

（日本女子大学）

幼児期の輝きと揺らぎ

津守　真

四歳のS子が、前晩私共の家に電話をかけてきたとき、「あしたはじいちゃんのうちにいくからね」と弾んだ声で言った。翌日、心待ちにしていたとき、電話があり、「おそくなってごめんね」と言った。私は、四歳の子がこんなに相手のことに気を使うことに感心した。母親が、いざ出かけようというときになって、下の子が風邪をひいているし、家のことも気になって、心に迷いを生じたらしかった。それから更に二時間程して、やっぱり今日は来るのをやめたと母親から電話があった。私は、あんなに心を浮き浮きさせて楽しみにしていたS子の落胆が目に見えるような気がして、考え直して出かけてくるようにす

すめた。するとS子が電話に出てきて、「いけなくてごめんね」と言った。

母親の話によると、大人の気持ちの迷いが子どもに映ったこともあるが、あと一週間で幼稚園に入園するという緊張感や不安が子どもの側にもあるらしいとのことだった。電話のあと、S子は持っている人形を全部出してきて、並べて遊んでいたとのことであった。大勢の未知の子ども達が集まる幼稚園のことを心に思い描いて、人形を動かしながら何かを考えているらしかった。私は、いつも私共の家にくるときのように何もかも忘れて遊んでしまっていいのだろうかと、手放しで祖父母の家に遊びにこられない、子どもの心境を察していじらしく思った。その小さな世界の中で、子どもがその日を過ごし易いようにと、その代わりに絵本を買って上げたり、会社の帰りにケーキを買って来るという心の慰めをつくってあげる若い両親の心遣いにも、子の親になった者の成長が見えて心強く思った。

子どもの世界の中に起こる葛藤や不安、たのしみやためらいなど、子どもが生きる上で避けられないことである。それは大人にも共通のものであるが故に、大人に共感もできる。また、大人のように度を超えた欲望や損得につながらない、大人からみればささやかな、つましい悩みや喜びであることに、私共の心を惹きつけるものがある。それをたいせつに思うし、それを踏みにじるような大人の勝手さに出会うと、子どものために何とか力になりたいと思う。幼児と交わるとき、私共はいろいろのところでこういう経験をする。

三月の末、私共の学校の幼児のクラスから、他の小学校にゆくことになったR子は、最終日の親子一緒の会食の日、母親が部屋に入ってきた途端に大声で泣いて家に帰る支度をはじめた。これから母親たちが持ち寄った特別の昼食がはじまろうとするのに、部屋中にひびく泣き声を上げ、母親の手を引いて帰っていった。この日が最後の日であることをR子は承知していたようで、午前中、私との間でいつもやってきた遊び、滑り台を一緒に滑ってひっくり返って笑うことや、食べ物の絵本をみて食べる真似をして笑うなど、一通り全部やった。帰るときの泣きわめきは、別れに伴うさまざまな葛藤を内に含んでいるように思えて、私の心を痛くした。

この一、二年、私は幼児のクラスで過ごすことが多かった。三学期の保育も終わろうとする頃、S夫は、机の上にジュースのびんが数本あるのを見つけた。彼はホールにとんでいって、赤色の容器を持ってきた。底に粘土が沈殿している。S夫はそこにジュースを入れてかきまぜた。あっという間のことで、大人たちは、ジュースが飲めなくなってもったいないと言った。S夫は更にポットからお茶を注ぎかきまぜた。この子にとってはジュースは飲むものではなく、いろんな液を一緒にしてかきまぜるための材料であった。ひとつのことを思いつめると、そのことだけの世界に入ってしまうこの子どもにとって、異質な

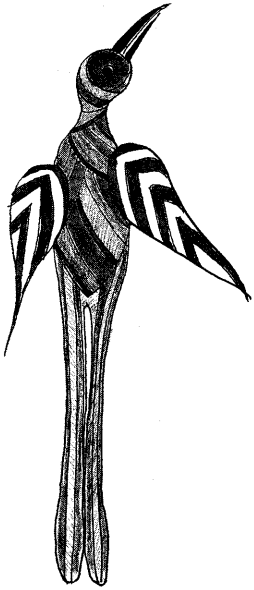
液をまぜる遊びをはじめたことは、この子なりの心のひろがりを示すものと私には思えた。このあと、S夫は流しでえのぐをかきまぜたりして、長い間余念なくこの遊びをつづけた。どうしたら、自分の心の中に異質な人や物を受けいれられるか、子どもはこうした遊びの中でいろいろとためし、自分なりの解決を見つけようとする。傍にいた母親は、普段からS夫はジュースを飲まないことを知っていた。そして液をかきまぜるこの遊びを、この子に大切な行為と見る私共の見方に共感を示した。数日後、S夫は庭のブランコで、私の膝に座り、身体を私にぴったり寄せ、顔をつけて長い時間過ごした。他の子も一緒にブランコにのっていたり、こんな風に私に抱かれたのははじめてのことだった。突然、ママどこ、ママと代わってと大声で泣いて母親をよんだ。ここにも子どもの心の葛藤があるように思えた。

幼児の心にふれて、大人の心が痛むこともある。また、ほのぼのとした温かさを覚えることもある。それに気付かないで通り過ぎてしまうこともある。幼児のクラスにいると、その両方のときがある。

幼児期は、人間の一生涯の中でも特別な時期である。幼児と交わるときには、大人もまた幼児期の感性にひきもどされる。幼児期の感性は、人間の心の底辺をつくっているのに、意識的な記憶に残らないので、大人の意識的な論理によって潰されやすくもある。私

共の世界がいつも幼児を一緒に含んでいるかぎり、幼児の心にこたえる感性と行動力は、大人の世界から失せてはならないものであると思う。

（愛育養護学校）



今からまいて
夏休みに咲かせるアサガオ

浅山　英一

夏の朝早く起きてみると、大きなアサガオが美しい色とりどりに咲いているのに子供たちは驚きの目を見張ります。

テラスのプランターに植えたアサガオは軒下から張った紐を伝って急ピッチではいのぼり、毎日のように花を咲かせます。

アサガオのたねをまくのはふつう五月のはじめですが、まいて一週間ほど経てば発芽して双葉をひらき、本葉が出はじめるとつるがのびて紐に巻きついてのびてゆきます。

さて、花のつぼみがつきはじめるのは七月になってからです。それまでの間、水や肥料をやっても花は咲かないのですが、やがて葉がついた一節ごとに咲きはじめるのです。たねをまいてから八〇日、二か月半はかかります。

庭が広ければ垣根やフェンスなどに自由に這わせてもよいし、大輪アサガオには花色も多く、毎朝、紅、青、紫、ピンク、白などの花が咲くように工夫すると夏休みの間充分にたのしめる花なのです。

アサガオの花芽ができるわけ

ここでアサガオの花はどうしてできるかを学んでおきましょう。

アサガオはもともと熱帯の植物ですから、高い温度で発育します。ふつう、五月にまくのはそのためで、かりに三月や四月にまいても、温度が低ければ発芽しません。平均二〇度になれば発芽するのですが、其後は夏の三〇度をこえるころに最大に育って花をつけるのです。

〈長日状態では花ができない〉

五月から六月末までの間は、毎日二分間ずつ日足が長くなってゆきます。本当は春の彼岸（春分の日）までは冬至から毎日日が短くなっていたわけですが、春分の日からは日一日と日が長くなってゆくのです。

アサガオは、かりに温度が高ければ発芽もするし発育もはじめるのですが、五月にたねをまいて育ちはじめても六月末の夏至までは毎日日が長くなってゆくので、かりに高温下にあっても花芽はできないのです。

つまり夏至までの長日状態（夏至の日照時間は十五時間、夜は九時間です）では花芽をつけないのです。

〈アサガオは短日植物〉

アサガオがつぼみつまり花芽をつくるには、毎日少しずつでも日照時間が短くなってゆく短日状態が必要なのです。ですからどんなにのびていても夏至が過ぎなければ花芽はできないのです。夏至をすぎて七月ともなり、毎日短日になりはじめると、つぼみは節ごとに発生して

七月の半ばすぎると、毎日花を開くようになるのです。
つまりアサガオは夏休みの子供たちのために咲く花だと言っても差し支えはないのです。

〈鉢植えは家にもってかえれ〉

どこの小学校でも毎年アサガオづくりをやりますが、せっかく五月にまいてだい分大きくなった鉢植えは、とても夏休みには水もやれないので、家へ持ち帰りなさいということがしばしば見られます。休暇となれば当番が出てきて水やりをするとはいうものの、たくさんの鉢植えの手入れは至難です。もちろん地植えにした場合はかりに水やりが不十分でも花は何とか咲きますが、それではみんなの勉強にはなりません。当番が花を見るだけでは困ったものです。
もちろん鉢植えを家に持ち帰った生徒たちは我が家で休暇中に花を見ることはできますが、五月にまいてから九〇日も一〇〇日も経ってからのことです。
五月にたねをまいて自然に咲くのは七―八月というアサガオは、最大限に育ってくれますから、花を見るためには最良の方法ですが、保育園、幼稚園、小学校はみな夏休みです。いかにアサガオがよく咲いても子供たちが留守では何のためにアサガオをまいたのか判りません。
そこで、夏休みであろうとなかろうととにかく最短日数でアサガオを咲かせてみようと挑戦してみたくなるのが当然です。

超特急で咲かせるチビ作りの方法

さきにアサガオはたねをまいてから花が咲くまでに八〇日かかると記しましたが、それを半分の日数四〇日で咲かせるスピード開花法をここにお伝えします。
子供たちもきっと興味をもって毎日の世話をすることと思います。
たねをまいて八〇日もかかれば真直にのばしたアサガオは屋根までとどくほどにつるがのびますが、チビ作りの方法では四〇日かかるというわけですからつるがのびるわけがありません。

チビ作りではわずか一〇―一五cmの高さで径一〇cmの花が咲くのです。しかも三本植えなら次々と三輪の花がたのしめます。

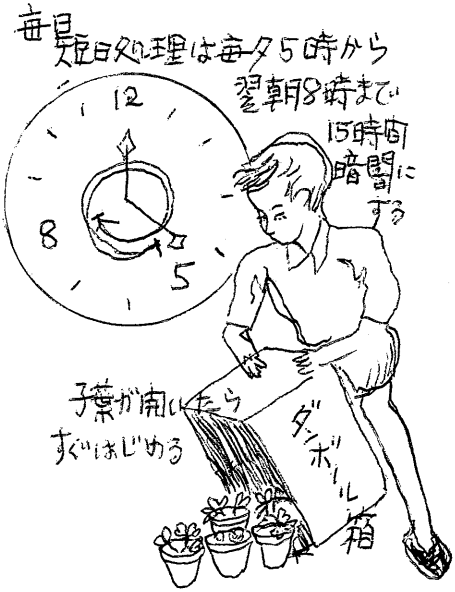
〈ダンボール箱をかける短日処理〉

リンゴやミカンなどの入った大型ダンボール箱を一個用意して、アサガオの鉢を五～六鉢スッポリとかぶせるようにします。

アサガオは双葉がひらいたらその日からダンボール箱を次の約束通りにかぶせたり開けたりするのです。

① 毎日夕方五時になったら箱をかぶせて中を真っ暗にする。光が入らないように破れたところや隙間にはガムテープを貼りつけておく。

② 夜はそのまま。もし雨がふりそうなら箱が濡れないようにビニールをかぶせて飛ばないようにしておく。



③　毎朝八時になったら箱を開けて鉢植えに日光があたるようにする。

つまり夕方はまだ明るい頃ですが、五時から翌朝八時までダンボール箱をかぶせてやれば暗闇の時間は十五時間になります。朝八時に箱を開けて夕方また箱をかぶせるまで、日光にあたる時間は九時間となります。これは十二月の冬至の頃の日照時間にあたります。

アサガオは双葉を開いたばかりなのにこの冬の日照時間にさらされて、おどろいて早速に花芽をつくる準備にとりかかるのです。

さてもう一つ約束があります。

ダンボールの短日処理をはじめたら、一週間は毎日確実に時刻を守って下さい。一日か二日やってみて途中で忘れたり、処理をやらなかったりするとアサガオの花がイビツになったり、所定の四〇日で咲かなかったりしてしまいます。

花が咲くまで四〇日と言いましたが、この短日処理は毎日つづけることが必要です。もし途中で二、三日休んだり、あるいは一〇日も留守にしたりすると折角早く花を咲かそうとしているアサガオが、途中で休んでしまえば約束の四〇日では咲かず、それ以上の日数がかかることになってしまいます。

〈いよいよつぼみが見える〉

短日処理を二週間もつづけるうちに双葉の間から本葉が出て、それが大体三枚出た頃に第三の本葉のつけもとに花の蕾がついていることに気がつきます。本葉自身も次第に大きくなり、その腋についたつぼみも次第に大きく育ってゆき、やがて四〇日近くなるころに明日は花が開くという状態になります。

〈いよいよ開花〉

本葉三枚目についたつぼみは、大きくなってある朝、おどろくなかれ花径一〇cmほどの美しいアサガオの花が開きます。その草丈はほぼ一〇cm、一鉢に三本植えとしたのですから三輪揃って咲けばしめたものですが、三本

のうち一輪とか二輪は咲いても三本揃って三輪の花が咲くことはあまりありません。そのために三本植えとしたのですから、毎日一輪ずつ咲いてもずい分たのしみです。

◀まきっぱなしでも短日処理すれば、40日で花が咲く

〈咲かせたい日を逆算してたねをまく〉

七月のはじめにたねをまけば三～四日で双葉がひらきますから、それから四〇日後に咲くとすれば八月の中旬に花が見られます。したがって八月でも九月でも咲かせたい日から四五日前にたねをまいてチビ作りをはじめることになります。

育てかたのポイント

〈鉢と用土〉

鉢　アサガオのたねをまく鉢はどこにでもあるプラスチック製の五号鉢をつかいます。

五号鉢は径一五cmですが、そのあたりにあれば素焼鉢でもかまいません。

プラスチック製鉢は底に水はけの穴があいていますから、ここへ鉢のかけらを一並べ敷いて水はけをよくしてやります。鉢の側面からは空気も入らず水も出ないので底孔に排水と通気をたよるより外にありません。

用土　アサガオは水はけのよい土でよく育つのですから、用土は赤玉土と腐葉土を半々にまぜてつくります。赤玉土といっても特別のものでなく、いわゆる赤土を二mm目の篩で細かいミジンをふるい棄てたものでよく、腐葉土はどこかのはきだめでシイやカシ、ツバキ、ケヤキなどの葉が、一、二年も経ってボロボロに腐ったものを使います。木の葉の原形がそのまま残っているものや腐りすぎて細かい灰のようになってしまったものではいけません。一㎤ぐらいの腐った木の葉ならよいのですが、スギやマツの葉は根がのびることに有害ですからまぜないようにしてください。

鉢の底には一並べほど鉢片をしいて水はけをよくし、その上に調合した土をみたします。

〈たねまき〉

アサガオのたねは他の草花に比べて大きいので子供たちにもまきやすいものです。五号鉢に三粒のたねをまきますが、これは一鉢に三本育てば何とか形がつくからです。

ところがアサガオはまいても芽の出ない堅だねがありますから、前以て数粒のたねを二晩水に浸しておいて吸水してふくれたたねをまくようにします。吸水しないで膨らまないたねはいつまで経っても芽が出ません。この水を吸わない堅だねはつるで熟しすぎたためです。堅だねを発芽させるには種皮をヤスリかナイフで削ってからまくようにします。

たねは人さし指の第一節までの深さに穴をあけ、ふくらんだたねを入れたら、砂をかけて水をやります。発芽が心配でしたら五個まいておき、発芽してから子葉がよくひろがったものを三本残すようにするとよろしい。

アサガオ豆知識

アサガオの仲間　アサガオはヒルガオ科の一年草です。世界中にヒルガオ科の植物はザッと一〇〇〇種類もあり、サツマイモやルコウソウ、ヨルガオ、ヒルガオなどと同じ仲間です。

日本アサガオ　西洋アサガオに対して昔から日本でつくられてきたアサガオを日本アサガオといいますが、改良種も多く花色は豊富、花の大きさ、性質などいろいろとちがいます。今、どこでもつくられる系統は大輪アサガオで花径二〇㎝のものが多く、一葉の腋に一輪咲くのが特徴です。

西洋アサガオ　外国で栽培されてきたアサガオを指しますが、これにもたくさんの種類があります。代表的なのはヘブンリーブルーというソライロアサガオで、花は美しい青（白や絞りもある）色で八月末から霜のくる日まで一葉腋に十数輪のたくさんの花をつけて見事です。

花の色素はアントキアン色素　アサガオにはたくさんの色がありますが、花びらを白紙になすりつけてその上から石鹸をぬると赤い花は紫に、紫色の花は青に、青い花は藍色に変わります。アントキアン色素の特性です。

つるを垂直にのばすと　軒先から紐を垂直につるしてアサガオのつるをのぼらせるとたやすく花が咲きませんが、アンドン仕立のようにつるをやや水平にらせん状に巻いてやると、早くつぼみがつき花がたくさん見られます。

丸だねは大輪に咲く　アサガオは一つの果実に五個のたねができるのでふつうは一個がスイカを五つに切った形をしていますが、大輪アサガオは三―四個のたねができるので丸くてコロコロした形をしています。たくさんのたねの中から丸だねを選んでまけば、大輪に咲く確率が大きいのです。

（園芸研究家）

子どもの少ない時代こそ
幼児教育の見直しを…

～次世代に向かって力をつける時が今！～

渡辺　真一

一、はじめに

一月二十一日、突然、編集部から原稿依頼を受けた。そのきっかけは平成四年十一月二十三日発行、日本経済新聞社の月曜レポート「**二世園長、改革に挑戦**」（関西版は「**園児集め競争に二世園長、反旗**」とでたが…）なる記事がきっかけであるとのことであった。

さてこの記事の反響は予想以上に大きく、多少の戸惑いを覚えるところであった。なぜなら記事を読まれた読者（主に異業種に属する方がた）からの問合せや質問があとをたたず、改めて幼児人口減少の時代に生き抜く異業種の関心の高さを思い知らされた。そんな折にいただいた原稿依頼ゆえ、お受けすることとした。

二、前途多難な私立幼稚園

ところで近年の私立幼稚園を取り巻く動きには非常に厳しいものがある。出生率の低下に伴う休・廃園問題、

私幼に対する経常費補助の見直しの動き、公立幼稚園三歳児就園の促進、労働基準法の改正、就業規則の見直し、人材確保の問題、教職員の人づくり、園内研修のあり方、教育環境・職場環境の改善、教育内容の一層の充実化…と、前途多難を感じさせる課題が山積するなか、厚生省が二月二十五日、保育問題検討会を設置し、保育所制度を大幅に見直すとのニュースが伝えられるに至り、全国の幼稚園の在籍園児数79・6％を占める私立幼稚園の今後の運営、経営に暗雲たちこめる感ありといえる。次世代に向かって力をつけるときが今だとすれば、私幼人の老・壮・青が一丸となり今かかえる難題の一つ一つをクリアーしていく団結力とエネルギーが必要な時であろう。

三、全幼交の設立

現在、私幼を取り巻く多くの課題にふれたが、じつは次世代の私幼の永続性を願う難題に「二世・後継者」問題がある。異業種も近年は世代交替期にあると聞く。私幼界にもこの波はじわじわと押し寄せてきているが…、現実は異業種に比べて世代交替のタイミングがつかみきれてないケースが多いようである。

そこで平成元年七月、北海道から九州までの私幼二世・後継者の有志が一堂に参集し、「全国私立幼稚園若手設置者・園長交流会（略称・全幼交）」なるプライベイトの会を発足した。この会は日本私立幼稚園連合会の時代に二十～三十歳代の若手（二世・後継者）が、団体主催の諸大会や研究会で出会い、それぞれ地域の様子や自園・自身の悩みをぶつけ合い、共に考え、励まし合うなど回を重ねるなかから誕生した会である。大なり小なりの危機意識を持ち合わせた仲間が、二世・後継者の立場から今後の私立幼稚園経営・運営のあり方について情報交換や研修を深め、将来への連携を密にとの思いが込められている。会設立時の趣意書には次のように記されている。

＊

『近年、就園対象児が年々減り始め、そのことが、

幼稚園の存立自体に大きな影響を及ぼし、様々な問題を引き起こし始めている。昭和四十年代は幼稚園があれば良い時代、五十年代は建物の立派さが要求された時代、そして平成時代は幼児教育の内容を問われる時代とも言われている。

一方、園長は世代交替の時期を迎えつつあるが、必ずしも世代交替は旨く進んでいるとは言えない状況がある。その原因としては、次代を担う若い世代が未だ力不足であったり、一世の影に隠れてその実力を発揮できないでいたりする事があげられる。

かかる時に、次代を担う若い世代の園長や園長職に就こうとする者は、園の最高責任者として、幼児教育の本質を見失うことなく、そして、それをしっかりと自分のものとして消化する能力を必要とされるであろう。

そこで時代を担う幼児教育者の資質向上ならびに情報交換の場として、既成の団体では出来ない研修の会とするため、ここに全国私立幼稚園若手設置者園長交流会を設立するものとする』

四、全幼交の活動と今後

さて上記の趣意書に賛同した仲間が参集しこれまで四回の大会を開催した。この会は会の運営上、参加人数を

一〇〇人定員とし密度の濃い運営を心掛けている。以下、第四回大会までの記録を簡単にまとめてみる。

〈第一回大会の内容〉

(1)基調講演／幼児教育の現状と将来動向（三菱総合研究所）

(2)問題提起／わたしの園運営（東日本・西日本　各二園）

(3)ディスカッション／そこが知りたい園運営

○園庭・保育室の環境　○保護者との対応

○教師との対応　○効果的な園児募集とは…

(4)工場見学／河合楽器竜洋工場

〈第二回大会の内容〉

(1)基調講演&質疑応答／女子職員教育の動向～職場でやる気を持たせるには～

○国際ホテルレストラン学校副校長　八幡瑛一氏

○ニッセイ商事㈱東京事業部取締役業務部長　安斎寅喜氏

(2)問題提起／わたしの園運営（北海道、京都）

／現状報告（各都道府県）

／ディスカッション

(3)ディスカッション／そこが知りたい園運営

○職員採用と人件費のあり方　○保護者との対応

○教師との対応　○効果的な園児募集とは…

(4)落語家を囲んで／ロールプレイ方式による、挨拶・苦情の処理など園長等の語り方について

○三遊亭京楽師匠

〈第三回大会の内容〉

(1)講演&質疑応答／幼稚園のソフトとハードの見直し

○園の建物、空間を考える（藤田建築設計事務所）

○園内の事故について（ＡＩＵ保険）

(2)講演&質疑応答／東京ディズニーランドのサービスと職員教育

○㈱オリエンタルランド常務取締役　北村和久氏

(3)ディスカッション／そこが知りたいあなたの園運営

○父親を引き込む園経営　○中間管理職としての後継者

○園の物的環境を考える　○人材確保及び園内研修

(4)講演&質疑応答／新教育要領を斬る

○文部省初等中等局幼稚園課教科調査官　柴崎正行氏

〈第四回大会の内容〉

(1)講演&ディスカッション／今、保育に求められるものは何か！

○文部省初等中等局幼稚園課教科調査官　柴崎正行氏

(2)ディベート（一つの争点を論議という形で解決策を見出すために行う論議の形式をいい、問題提起をめぐって肯定派と否定派に別れ、主張をぶつけあう）

○定員オーバー　○完全五日制　○英才教育　○制服（園児・教職員）　○延長保育　○給食など

(3)意見発表／リーダーとしての設置者・園長のあり方を考える（栃木・神奈川・千葉）

講演／同右のテーマを受けて

○経営コンサルタント　川上真央氏

ディスカッション（参加者全員、川上先生）

(4)講演／若手女子職員のプロ意識高揚のさせ方

○㈱コスモジェフィー代表取締役　浜田マキ子氏

以上、第四回大会までの内容紹介であるが、この大会に参加するについて、当日の運営をスムーズに運ぶための資料を一〇〇部、持参してもらうのも本会の特色といえよう。ちなみに第一回の持参資料は、(1)園庭・保育室の環境に関する資料　(2)保護者向けの印刷物などの資料　(3)教職員との対応に関する資料　(4)園児募集に関する資料などであった。

第五回大会は東京ベイにて開催し、今後の更なる深まりを求めるとともに、会員相互の結びつきが強固になること、そして設立の趣旨に基づく地道な活動を通して、諸先輩が築いてくれた私幼が継承できる力を身につけたいと念ずるところである。

五、全幼交のめざす幼稚園

〝子どもの少ない時代こそ、幼児教育の見直し…を〟これこそ全幼交が願う活動の行先である。諸先輩は幼稚園教育の歴史と建物を築いてくれた。この事実を受けとめ次なる課題は当然のこととして、教育内容の充実、設置者・園長を含むスタッフの資質の向上、少子化時代に耐えうる経営基盤の確立、地域社会の市民権が得られる

私幼、そして二でふれた難題を一つ一つ乗りきりながら、〝幼児教育のあり方とは〟を、全幼交に所属する園にかぎらずすべての私幼それぞれが考求してほしいと願う。

さて、幼児教育は少なくとも小学校教育とは異なり、また小学校教育の下請けであってはならないと考える。また学校教育法の第七七条に、「幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」とある。当然のことながら幼児の心身の発達にとりマイナスとなるような教育実践の姿は好ましくないだろう。

園児減少の折、生き残りをかけて英語、漢字教育やパソコン教室などの英才教室、絵画や音楽による情操教育など特色づくりにしのぎを削る園が増えるようでは困る。なぜならこうした単なる人集めだけの競争は、園児のためにも幼稚園のためにもならないと考えるからである。五年、十年先の私幼と二十一世紀に生きぬく子どもたちを願ったとき、できるかぎり本来の幼児教育を目指すことが今、私幼全体に課せられた課題であろう。全幼交では目指す幼児教育のひとつの柱に「遊び」を位置づけ、「遊び」を通して子どもたちが様々な体験のできる園生活の実践を…と取り組むところである。「幼稚園における教育は……遊びを通しての指導を中心として行わ

れる必要がある」（幼稚園教育指導書増補版）と明記されていることに鑑み、幼児の特性が十分に発揮できる幼児教育を強く一般社会にアピールする時が今であろう。幼児教育の重要性が叫ばれて久しいが、未だ幼児教育への理解が一般社会に浸透し得ていない一因が「遊び」であると思えてならない。それゆえにもっと「遊び」を取り入れるなどした新たな幼稚園像をつくり出さねばならない。全幼交のめざす幼稚園の大きな願いである。

六、私の園の実践からひとこと

ここで当園の実践についてふれてみたい。当園は高層住宅（十三階）の一階に園舎をもつという、きわめて都市型の幼稚園である。昭和五一年から五二年にかけて、一挙に一つの町（五棟・一八〇〇世帯）が形成され、新住宅と新幼稚園、そして幼稚園と地元の出合いがあった。その姿は、今思えば、家庭と園、園と地域が連携し合う土壌として、実によい条件にあったと考える。

新設の園（昭和五二年四月開園）は、〝親と子と先生の手づくりで〟……というスローガンではじまった。この願いは園を拠点にして、園がこの地域の場（地域センターの一つ）でありたいというものだった。しかも子どもがそのキューピッド役となって……、子どものつきあいが親のつきあいを生み、親のつきあいが広がると住民の連携意識も深まる、このあたりまえの図式が年とともに大きくなってきた。当園の位置づけも、園が単にあるというのではなく、地域に密着し、根づくなか、十七年目の一年に突入している。

ところで開園頃、園の周囲には仲間の私立幼稚園五園、民間保育所二園、公立保育所四園をかかえるという厳しいなか、通園バスは運行しない、給食や長時間保育はしない、住宅住民への配慮から午後二時以降は音を出さない、課外教室の活動もしない…という条件のなかのスタートであった。今振り返ってみると、右記の状況をクリアしてきた活力、実践活動の数々が今日の園経営・運営の基礎力として育ってきたのではと念ずるところである。以下、二～三の事例から私の目指す園経営、運営

の一端についてふれてみる。

＊

① 子をもつ親のだれもが、園やクラスのようすを知りたいと願っている。

○ 今や園だよりやクラスだよりを発行し、親の期待にこたえる通信活動は、ごくあたりまえ、どこの園でも取り組んでいると思う。当園では開園以来、この通信活動を重視。今秋園だよりは通算一〇〇〇号となる。園だよりの発行は園長の役目。園長の人柄、教育への想いを伝える方法の一つといえる。

② 教育の内容や方法をできる限り親に理解してもらうことを願って…

○ 保育参観の機会をできる限り多く持つ。事前に参観の内容と見どころをクラスだよりにて知らせ、参観後はクラス担任にかわって園長が参観内容、クラスの様子などを伝え、父母の質問にも答える。担任になりかわっての話だが、回を重ねるごとに園と家庭との距離が縮まるのを肌で感ずる。

○ 三か月に二回のペースで〝園長ぶつぶつ会〟なる父母対象の会を催している。子育ての話、教育課程の話、園での悩みごとの話、今頃の子どもの姿の話、幼稚園界の動きについての話、幼小関連の話、生活科の話、保育行事の話…とテーマはつきないが、毎回百人前後の父母が参集。熱気を感ずるひとときである。

○ 具体的な教育内容を伝える一つに「〇期の指導計画」の印刷物がある。期毎の子どもの姿、ねらいと内容、生活指導、安全指導のポイントなどを一枚にまとめ、家庭に配布する。〝わかりやすい幼児教育〟を自認する私にとっては、この三方法は家庭と園を結ぶ接点といえる。

③ 幼稚園は楽しい生活の場である。

○ このテーマこそ開園以来、教育内容の柱の一つとして追求しつづけている課題である。もともと幼稚園は、子どもたちにとって楽しい生活の場である。それゆえに幼児にとって楽しい生活とは、どのような姿なのかを子どもたちと一緒に創り上げていく必要があ

る。

④　幼稚園はいろいろな体験生活のできる場である。

○　幼児期は、頭で学ぶ時代でなく「からだ」で学ぶ時代であるという。ことばでいくらいっても分かってもらえないことが、目で見、鼻でにおいをかぎ、手で触って確かめ、そして頭で考える機会があってはじめて子どもの物を見る目、感じる心、考える力が育つものである。本物との触れ合いの中で育つ子どもの心、今、忘れられているこの体験を身近な生活圏のなかで獲得できる園生活を今以上に送りたいと考える。

⑤　幼児なりに生活する力が獲得できる幼稚園生活でありたい。

○　このテーマも今、求められる課題であり、本園ではいちばん大切にしたい課題である。三歳児は三歳児なりに、四歳児は四歳児なりに…と、それぞれの年齢の園生活を精一杯に、しかも手ごたえを感ずる毎日であってほしいと念ずる日々である。活力のある園生活、生活実感がもてる園生活、そして仲間と生活が楽しめる園生活、そんな幼稚園生活を目指してがんばる毎日である。

七、さいごに

ともあれ今の幼稚園界に求められることは、なにごとにも一所懸命に取り組む姿と活力の復活ではないだろうか。園長を先頭に職員集団が一丸となり、熱意のこもった実践の積み重ねがいつしか親の共感を呼び、私幼の暖かさを伝えていく術となるだろう。本来の幼児教育をそれぞれの園がこれからも考求してほしいものである。

なお、全幼交の出版として『いざというときに役立つ本保育ＯＫ大事典』（世界文化社刊、一九九二年六月一日発売、三九七頁）を公にした。

（横浜市・スカイハイツ幼稚園）

堀合先生に学ぶ(4)

～保育者の関わり～

立川　多恵子

十文字幼稚園には、三年保育のクラスが二つある。その一つが堀合先生の担当する「すみれ組」であり、他は川端先生が担当する「たんぽぽ組」である。

「うちのクラスの子どもはどうも落ち着きがなくて……」という川端先生の悩みを聞いてから二週間ばかりたったある日、私は再び十文字幼稚園を訪ねた。

堀合「たんぽぽ組、少し変わりましたでしょう」

立川「そうですね、子どもがよく遊べるようになりましたね。先日たんぽぽ組を見せていただいた時は、先生の手が八本なければ足りないと思ったほどでしたが……」

堀合「川端先生の保育が少し変わったのです。先生はとても優しい方です。それに声がきれいなんですが、その声が子どもの頭の上を通り過ぎてし

まっていたようです。」

そこで今回は保育者の関わりについて、まず「優しいということ」と「声が子どもの頭の上を通り過ぎる」ということから考えてみたい。

優しいということ

実際保育している川端先生を見ると、お姉さんのように優しい。

しかし、子どもに優しくしようと心がけるあまりに、子どもの行為のすべてを受け入れようとして果たされず悩むことが多い。堀合先生は川端先生に「子どもを叱ってもいいのですよ、子どもだって先生に叱られたいと思うことがあるのですから」と話していた。

保育者は子どもが早く園生活に馴れて欲しいと願って、自分自身の感情を押し殺してまで優しく受け入れようとする。ところがそうした保育者の態度が子どもに取って欲求不満のもとになることもある。

四月、母親から離れて園生活を始めた子どもは、まずよりどころを先生に求める。中には何を始めるにしても心配そうに先生の方を見て行動する子もいる。例えばテーブルの上のクレヨンを使おうとする時でも、先生の顔を見て、先生が頷いてくれると安心してクレヨンを取り出し、絵を描き始める。

子どもがやろうとすることをできるだけ容認して行くことは、入園当初の保育者にとって重要な仕事である。そのうち子どもたちは「幼稚園では何でもやれそう」といった自由感を感じ始める。そして積極的に遊び出す。そうなると、時には保育者にとって困ることも起こる。

子どもの主体的な活動を尊重するためには、自由感のあることはたしかに大切であるが、園生活の自由は無制限ではない。また制限があることでかえって子どもが安定することもある。堀合先生

は子どもと生活する中で、「望ましいと思うこと」はほめ、「困ると思うこと」については、はっきり「困る」ということも必要であると考える。

「俊夫ちゃんそれはなしよ」と言う堀合先生の声がする。俊夫が積木を足で蹴っ飛ばしたからである。俊夫の始める遊びはなかなか面白いが、時には私が「あれっ」と思うようなこともする。そんな時先生はしっかりした口調で叱る。自発的に遊べるようになった子どもについては、堀合先生は保育者が困ると思うことは遠慮なく、「何が困るか」はっきりと伝えて行く必要があると言う。

川端先生は優しいが、その点がはっきりしなかったので、子どもたちが混乱してしまったようだ。堀合先生は川端先生に子どもに対して、もっと自分の気持ちをはっきり表現したほうがよいと助言する。子どもを受け取めるということは一人ひとりの子どもに先生が心をこめて対応していくことであり、その結果叱ることがあるのは当然だと考える。

たしかに子どもも親身になって対応してくれる保育者がいて初めて「困ったらきっと助けてくれ

る」といった安心感が生まれ、信頼関係が確立すると言えよう。

2、声が頭の上を通る

川端先生は声が細くて美しい。しかし世の中には声はやたらに大きいのに、言葉がはっきりしない人もある。その反対に声は小さいが、心に感じる言葉を話す人もいる。

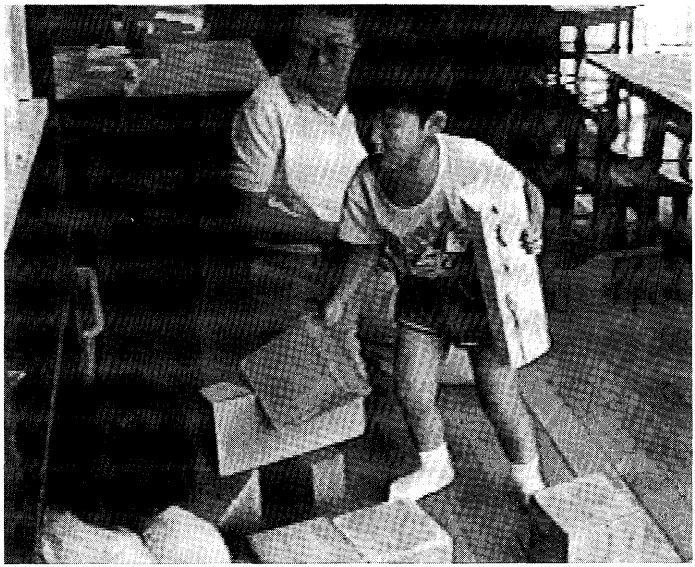
「先生の声が頭の上を通る」といった表現は単に物理的な現象を言うのではなく、もっと心理的なものを表現している。

川端先生はこの春、十七人の三歳児を担当して、今年こそしっかり保育しようと考えた。そこで保育室や園庭をこまめに走り回って子どもの要求にこたえようとした。私がたんぽぽ組の保育室を覗いて「川端先生は手が八本必要」といった感想を持ったのはそのためである。十七人の子どもの要求に応えようとすればするほど、忙しく走りまわることになる。

とかく私達は子どもの要求に性急に応えようとして、言葉で対応することが多い。そのため先生の声が子どもの頭の上を通り過ぎることになる。もっと一人の子とじっくり関わることが必要である。子どもとの関係を大切にする時、「先生の声が子どもの頭を通り過ぎる」ことにはならない。そのためにはどうすればよいか、それが難しい。

今朝、川端先生は堀合先生から「あんな時はしっかり愛ちゃんに関わってあげることが必要よ」と言ったアドバイスを受けていたが、どの子の要求にでも応えようとすると、なかなか一人ひとりに丁寧に関わることができなくなる。そのため肝心な時に子どもの世話を第三者にゆだねなければならないことも起こる。

堀合先生は子どもとの信頼関係が確立するまでは、担任が自分の手でしっかりと子どもの世話をすることが必要であると強調する。そういえば先



生は私が手伝おうとした時、とても遠慮した。それは遠慮というより「今は手を出されては困る」ということだったのだろう。

最近堀合先生の保育を見ていて感じたことがある。先生は困ると思うことについて、率直に言葉や態度に表現して伝えているが、叱ったすぐ後でも、その子のよいところを見つけると、ほめたり、認めたりしている。

積木を足で蹴っ飛ばし、堀合先生から「それはなしよ」と叱られた俊夫の場合もそのあとすぐ、積木を沢山使って工夫して車庫を作り上げた時「車はここから入れるのね、よく考えたわね」とほめられた。俊夫はすっかり得意になって、先生にいろいろ車の入れ方を説明していた。

先生に「自分が努力して作ったものを認めて貰える」ことぐらい子どもにとって張り合いのあることはない。先生が一人ひとりの子どもとしっかり出会うことを大切にしていると、子どもの側に

立ったさまざまな対応の仕方が生まれる。それがある時は叱責だったりある時は承認だったりする。保育者の関わりは叱ったら、次はほめるといった技術的なものではない。

3、子どもの側に立って考える

あかりは入園してしばらくすると、自分のロッカーの中にもぐり込んで絵本を読んだり、友達の遊んでいるのを見るようになった。入園して一か月くらいしてからのことなので、私は園生活に少し馴れたところで自分の場をロッカーの中に求めることができたのだろうと考えた。

降園時間になると、先生が「あら晴ちゃんまだ帰ってこない」と言う。あかりはその言葉を合図のようにして、早速ロッカーから出て来て園庭に飛び出す。そしてしばらくすると、必ず晴彦を連れて戻ってくる。

堀合先生も始めは「あら助かる」と思っていた

が、それが毎日続くので少し考えてしまったようだ。先生は私に「先日、みゆきちゃんが晴彦ちゃんを迎えに行ってくれたのでほめたら、それをあかりちゃんが聞いていたのか、翌日からあかりちゃんが晴彦ちゃんを迎えに行くようになったのです。私も初めのうちは『嬉しい、あかりちゃんが動き出した』と思っていたのですが、先生にほめられるから『迎えにいく』というようなことが子どもに定着するのはよくないと考えて、近頃はあまりほめないことにしているのです」と言われた。

あかりはこれまでも「もうおかたづけね」という先生の言葉に敏感に反応して、先生の傍でせっせとかたづけたりしていた。あかりの場合は自分から積極的に遊ぶことは出来ないが、先生から課題が出されれば、その活動に加わることができる。そんな時、晴彦を迎えに行くという役割が見つかり、勇んで行動を起こしたのだろう。

堀合先生は「ほめられるからやる」といった他律的な行動パターンを助長する機会を子どもに与えたくないと考えているのだ。

その日私はあかりの後を追って園庭に出てみた。あかりは下靴に履き替えると、迷わず園庭の反対側の隅にある砂場に急ぐ。あかりはきっと晴彦が何時もその砂場で遊んでいるのを知っているのだろう。砂場で晴彦に出会うと、あかりは無表情な顔で「もうおかえりよ」と言う。晴彦の方はまだ遊んでいたいのか、「今日はおかえりなし!」と叫ぶ。私が晴彦を迎えに行ったのだったら、彼の手を握って、早速保育室に連れて帰るのだが、あかりはそうしない。晴彦が池に水を入れたりしながら、遊び続けているのを傍でじっと見ている。

そのうち晴彦が自分からやめて、保育室の方に歩き出すと、あかりは晴彦の後をついて行く。晴彦が途中で園庭にしゃがみこみ園庭の砂で山を作

り始めると、あかりもしゃがみこんでそれを眺めている。そのうち、あかりもその山に白砂をかけ始める。晴彦が納得したのかやめて立ち上がると、あかりも立ち上がる。晴彦が保育室に向かって走ると、あかりも後を追って走る。

保育室の前のテラスには、堀合先生が迎えに出ている。晴彦はその先生に歓迎されて、抱かれて保育室に入る。あかりはその横をそっと通って椅子に腰掛ける。

晴彦の気持ちに寄り添いながら保育室まで誘導するあかりの姿を見て、私は頭が下がる思いがした。このことを放課後堀合先生に報告すると、先生は「そうなんです。他の人も同じようなことを伝えてくれました。毎日一生懸命迎えてくれるのです。考えてみると、あかりにとって大事な経験かもしれませんね」と言った。

晴彦のお迎えは、あかりにとって楽しい経験ではないかと思う。たしかにあかりが晴彦のお迎えを始めたきっかけは、先生にほめられたいと思ってのことかもしれないが、実際に晴彦を迎えに行ってみて、晴彦と行動する楽しさを経験し、それがあかりにとって結構充実した時間になったのではないか、したがってあかり自身にとって、そのひとときは重要な時であったにちがいない。

（十文字女子短期大学）

菊池先生を思う

村田　修子

平成四年の終盤には様々なことがあった。が、その中で菊池フジノ先生とお別れしなければならなかったことは最もつらく悲しいことであった。

このお知らせを受け〝アッ〟と思ったときにすぐ、やさしい笑顔、口をすぼめて恥ずかしげな様子をなさる笑顔がすぐ思い出されて、自然に涙が溢れた。ここで先生のことを書くことによって先生を思い出し、ご冥福をお祈りするのは、永くおそばで過ごさせて頂いたもののつとめだという気がする。

間もなく二十一世紀を迎えるが、現在は大変な二十世紀を生きぬいてきた人たちである。その大変な時期に学校を卒業して、何も

分からないまま社会に出たときに出会った人、相談にのって頂いたりアドバイスを受けた人は「忘れ得ぬ人」である。私にとって菊池先生はまさにそのお一人なのである。

お茶大の附属幼稚園につとめていたとき、私と先生は同じ駅の南口と北口に住んでいた関係で、よくご一緒に帰った。また私が教育実習をしたとき、小学校で三女の道子さんを、女学校で二女の弘子さんを担当したこと等で、何となく親しみを感じていた。それに加えて先生の周辺にただよう雰囲気が〝甘えられるお母さん〟という感じだったので、遠慮なく何でもお話しできたのだと思う。

帰りの電車の中では話がはずみ（今考えれば、先生にとってはご迷惑だったのかも知れないが…）園ではうかがえないような事なども聞かせて下さった。その中の一つ、

現在音楽の大御所としてご活躍の柴田南雄先生が、同級の女の子と一緒にだまって園を出て駿河台下までおりてきて市電に乗り、小川町まできたとき切符を売りにきた車掌さんに手を出して切符をもらおうとして（切符は買うのではなくもらうものだと思っていたとのこと）不審に思われ、小川町でおろされてしまいうろうろしていたとき、どなたかが幼稚園に電話をしてくれたので迎えにこられて園に帰ったことがあったとの話で、大騒ぎしていた幼稚園では、倉橋先生の心づかいで、〝このことは母親には聞かせないでおきましょう〟と、倉橋先生自ら父親の方にだけ連絡をしたいきさつや、園をたずねてこられた先生方の時代のことや、第二次世界大戦の頃のことなどを伺った。

その当時大部分の人が好きであったドイツ

のヒットラーが倉橋先生は嫌いで、イギリスのチェンバレン首相が好きだった。菊池先生も同じだったことや、倉橋先生は英国紳士と同じに〝いつも白い手袋をして帽子をかぶられ、ステッキを持って歩かれ、とてもおしゃれでいらっしゃったのよ〟等々、多分に倉橋先生と関連のあることが多かったように思う。

伺ったお話や、先生方がみんなでお食事をしているときのふれ合いなどから、ウィットいっぱいの倉橋先生のおっしゃることにツー、カーという反応をなさったように思えたし、倉橋先生もその雰囲気を楽しんでおられたという感じであった。

幼稚園界で菊池フジノ先生、というと、ご存知のように「人形の家」ということがすぐ頭に浮かんでくる。倉橋先生のおっしゃられたことをもとに先生とご相談をしながら、人形の住む家を子どもたちと相談しながら作り、お人形が生活するのに必要と思われるものを整えて、子どもたちの友だちとしてお人形を存在させた。

私はこの時期のことを直接は知らないけれども、このときのお二人の先生の意気はピッタリと合ったものだったのではないかと想像される。それは、菊池先生は一つのことに熱中なさる方だからである。熱中なさるという話では次のようなこともある。

菊池先生が女子高等師範学校の生徒でいらっしゃったころ、バイオリンの名手ヤッシャ・ハイフェッツが来日した。寄宿舎にいた先生は願ってその演奏を聞きに行き、それに大変感動して、七月に入って夏休みに宮城県の実家に帰るとき、バイオリンを買いこん

で、家に帰ってから練習に励んだが、周囲から非難を受けてからは納屋に入って練習に打ち込んだが、しめ切った中なので〝その暑さはこたえたわよ〟とおっしゃった。相変わらずひどい音なので親にやめるように言われた、ということであった。

▲　幼稚園百年記念式典のとき、お茶大附属幼稚園での園遊会で。珍らしく手を上げられて晴々とした菊池先生。左側は山村キヨ先生。

またお茶大の附属幼稚園で、毎月の誕生会のときに先生方がリズム劇をよくやった。そのとき演ずるものによっては先生にも参加して頂いた。お母さん役や、申しわけないけれどお婆さん役をよくやって頂いた。「ちびくろサンボ」をやったとき、お母さん役になっ

た先生はこりにこった。スカートはこれ。頭にかぶるものは……。めがねははずして、イヤリングはこれで作るわ。とキラキラ光った何かの環を適当に長くつなげて、南の国のあついところのお母さんになるべく、いろいろと工夫をなさった。演技も〝こうした方がいいかしら〟〝どうみえる?〟というように本当に一生懸命にこられた。

演劇・演技に興味を持たれ、幼児向きの人形劇の台本を作られたこと等も知ってはいたが、〝あっ、こういう熱意で取り組まれたのだな〟と分かったし、こういう点でも倉橋先生と気心が合っていらっしゃったのではないかしらとも思った。

私が就職したての頃、先輩から〝菊池先生はとても頭のきれる方だから、実習に来た学生は「こわい」とよくいうらしいわよ〟というのを耳にしたことがある。私は先生とそういうふれ方はしたことがないのでただ聞いていたが、そういわれてみると、こういう事柄をいうのかな、と思ったことがある。二年程前にお会いしたとき、とった写真をお送りした。そのときのお礼のお葉書に

〝写真の数々、ありがとうございます。機械と腕の優秀さが偲ばれます。皆がとても美人に写っていますね。私までが……。〟

（後　略）

ウイットのきいた表現に、若しかしたら若い学生さん方はおそれをなしてしまって、そういう見方をしてしまったのではないかしら、と思ったりした。

先生は和服を召されても洋服を召されて

も、とてもとても、はいからだった。

私が幼かった頃、町の中にははかまをはいて少しヒールの高い皮靴をはき、着物の袖をひらひらさせていた学生さんの姿があった。現在は卒業式のときなど見かけるようになったあの姿である。

それはとてもはいからな人のように私には思えた。その雰囲気が菊池先生に感じられて懐かしかった。その雰囲気は子どもと同じように夢があって、初めて幼稚園という未知の世界の教師になってとまどっていた私は、そんな思いもあって先生にいろいろなことを相談して甘えていたように思う。

忘れられないことばは、私が幼稚園で自分の学んだこととは違うことをしている悩みを一寸もらしたとき「そう思っているのなら、私のようにどうにもならなくなる前に早くそれをしなさい。早い方がいいわよ。」私は耳を疑った。菊池先生の口からそういう趣旨のことばを聞くとは思わなかったので忘れられないのである。先生も私と同じように悩まれたのだろうか。どのように、何をしたいと思っていらっしゃったのだろうか、と思いをめぐらしてみたが結局は分からなかった。それに普段お子さんといらっしゃる先生は全く幼稚園にいることを楽しんでおられるご様子であったし、成長したかつての子どもたちのことを話される時はとてもうれしそうになさっていらっしゃったので、そこからは迷われたときがあったなどとは思いも及ばなかった。

何年かたって〝あなたもとうとう……〟といわれたけれど私も〝私も案外子どもが好きだったことを発見したので……〟ということ

でこの話題は終わりになった。

その後私が先生に言ったことばは、〝先生、腰をのばして下さい。まがってますよ〟とお腰をポンと叩いて遠慮なく申し上げた。

〝あらそーう。またいわれたわね〟何回かそうして腰をのばして下さった。

あるとき、私の背中をポンと叩いて、〝あなたも背中がまがってますよ〟と、

そのときの先生の顔は、いたずらっぽく、そしてほこらしげで、「かりは返した」と満足なさった様子が読みとれた。

〝先生、何の遠慮することなく思うままに甘えさせて頂いて有難うございました。〟

（洗足学園短期大学・同附属幼稚園）

保育への視座(10)

――若い保育者の方々へ――

河邉　杲

学期が終わると、殆んどの保育者の方は、子どもひとりひとりについてどのように成長したかを、整理されていることと思うが、「私の保育」についても、子どもひとりひとりとの、かかわりを通してふりかえって見られていることだろう。この「ふりかえり」は保育者の経験などから多分様々だと思う。

次に紹介するのはF幼稚園の四歳児担任のN先生が三学期末に一年を通して「ふりかえり」をされた報告の一部である。特に三学期になって保育者が気づき自分のこれからの保育についての課題を確認されたところを紹介したい。

――もうあと少しで三学期も終わるという頃になって、SI児ST児K児（いずれも男児）の三人についてはクラス内の他の子どもたち

よりも多く三人の名前を呼び注意を喚起しなければならないような、とても気になる存在の子どもではあったが、私は三人の表面的なところ（私の目に写る活動、特に私の気になる活動）にのみしかかかわって来なかったことに気がついた。この三人の子どもたちはグループで、まわりにある用具などをいろいろなものに見立ててマンガのキャラクターになるなどのごっこやままごとなどの遊びが多く、三学期になっても片づけの活動に時間がかかり、クラス全体でする帰りの活動などにおくれてしまうことがしばしばであった。少しゆとりをもって片づけのできるよう助言をしてみたりしては見たが、スムーズにできなくて、私が一緒に片づけることをすることによってやっと何とか片づけられるようになって来た。私が子どもたちをことばで追い廻すようなことから一緒に行動することに、やっと気づいたことに私自身ショックでもあった。またその片づけの時に「ケーキやさんだったみたいね」とその時使った用具などを片づけながら話しかけた時、その中の一人が「食べに来てくれんやったね」とぽつり。そのことばにまたまたショックだった。

そうだこの三人の子どもたちは毎日元気に遊んでいるように見えていた。また日常的な会話もよくして来ていた。しかしふりかえってみると、遊びを通しては、その内容や、イメージにふれたり、要求を理解するようなかかわりはほとんどしていなかったことに気づかされた。

つまり、私の方に要求して来たり、かかわりをもとうとしてこないので、自分たちなりに遊び込んでいるように見える子どもたちには、「遊んでいるからいいわ」となっていたのである。子どもの自発性、自主性にかこつ

けて、積極的に関心をもつ姿勢ではなかった自分が見えて来た。

このようなことに気づいた数日後に、年中組で、じゃがいもの苗を植えにバスで出かけた。その日は三月のとても暖かい日で苗植えも早く済み、近くの広場でお弁当を食べることにした。食事後、子どもたちは目を輝かせてころげまわって遊んだり、少し離れたところへ「ぼうけん」といって出かけて行っては戻って来て、私に「川があったよ」「虫がいたよ」「他の幼稚園の人も来ているよ」など見たこと発見したことを報告してくれていた。また小さい名も知らぬ草花を「おみやげ」といってもって来てくれたりもしていた。その時、小川の方から大きなビニール袋を重たそうにひきずるように持って来る前述の三人の中のSI児の姿が見えた。一瞬、「うわぁ、今度は何をしてくれたんだろう」と日頃の行動のことから心配が頭の中をよぎった。しかし、とにかく落ちついてよく話をきこうと思い直し、たずねてみた。するとSI児は「おみやげ。川の水がきれいかったけんもってかえっと」とあたりまえのようにこたえた。私はいままでにこんなすごいおみやげを見たことも聞いたことも（もらったこともの意味）なかったので、よもやそんなことを考えつくなんてと、とても驚き感動した。SI児らしい個性的な発想のおみやげについ笑ってしまったが、私の心の中では本当にバスにまで持ち込んだらどうしようかと心配も生じた。その私の心配が通じたのか、しばらくして川に水を戻し、また別の場所に出かけた。私はこの時のSI児の発想に驚かされたこともあってSI児のあとを追うように付いていった。そして池の側に立って池の中を見ようとしているSI児を見つけたが、その池はとても

大きく深そうだったので「余り近づくとあぶないよ。落ちたら先生助けきらんよ」とすぐに言ってしまった。しかしそんなことばにはまったく耳をかさず、池の縁の石の先に足をのせてのぞき込む、また少し歩いてのぞき込む、の繰り返し。背後から何度声をかけても同じことだと思い、彼のすぐ背後を付き添うようにして付いて廻った。SI児なりに池を観察して廻り気持ちは満足できたように思われた。SI児には私が背後を付添うように心配しながら一緒にまわっていることを感じているようにも汲みとれた。このことによってSI児と私はとても近づけたように感じた。

この日のことをふりかえってみると日常の園生活の中では危険そうだと気づくと（限度もあるが）すぐ「あぶないから」、不潔なように感じると「きたないから」と制限ばかりで子ども自身の体験の場を減らし、さらにその中から生まれ出てくるかも知れない発想や創造性などの芽をつみとっていたのではなかろうかという気が強くして来た。――と。

ここで保育者自身気づかれたことは、

(一) ことばかけだけによるさせようとすることの前に保育者も子どもと共に生活すること

(二) 遊んでいるからいいわと見放さないで積極的関心をもつこと

(三) 子どもの要求の理解とそれを共感し共有しようとつとめること（時に方向づけたり、制限することも必要）

は、いずれも保育者の保育の姿勢の基本として常に心して行きたいことだと思う。このことは前回までの「保育への視座」の中でいろいろな角度からとりあげて来た事がらでもあるが、こうしたことはなかなか講義や講演を聴いたりして気づいたり、見直したりできることではないことを若い保育者の方々も少し

ずつ学んで来て下さっていることと思う。

それは「私の保育」実践の中で、子どもとどうかかわって来たか、どうかかかわっているかなどをあるがままに（保育者の心持ちや心の中をありのままをことばにしてみること）見つめ、さらにそれを書きとめることにつとめていくしかない。なお、前述のN先生の事例に即して欲を言えば、例えばSI児が水を「おみやげ……」といって持って来てくれたとき、驚きや心配やいろいろ複雑な心持ちは伝わって来たが、どのようにそれを受けとめられたのか。表情までは記述できないにしても、言動はあったのかなかったのか、今少し記述してくだされば その「かかわり」の姿勢が自分にも他人にもよくわかったと思われるので、保育者自身のことばかけを心持ちと併せて記述してみられるとよいと思う。そしてそれを教師仲間に聴いてもらったり、読んでもらって、コメントがあればそれをいただかれるとよい。

このようにして気づいていく道程がとても大事なことである。この道程が真の「私の保育」への道をつくっていくことなのだと思う。

インドの詩人で哲学者であるタゴールのことばの中に「道のある場所では、私は私の道を失う」ということばがある。

あたえられた道だけを歩もうとし易い。また、そういう教育を受けて育って来ている面も強い。

子どもたちは、どうであろうか。子どもたちにも私たちの道を歩ませてやりたいと思う。

「私の保育」への道も私がつくっていくしかない。子どもたちと私たちの仲間や先達に支えられながら。

（元・洗足学園短期大学）

公教育は家庭教育に
どこまで関与するか(4)

ありふれた生活を見直すことから

伊集院　理子

今回、「公教育は家庭教育にどこまで関与するか」というテーマの原稿がまわってきて、はたと考えた。私は、それぞれの子どもが満たされて一日を過ごせるようにと、子どもとのやりとりを大事に過ごすことで手一杯で、普段はあまり意識せずにきたが、幼稚園教師として、「公教育」を施す立場にあるのだ。私のしている日々の保育活動が家庭教育にどのような影響を与えているのだろうか。又、一方では、子育て真最中の親として、目一杯「公教育」の恩恵に預っている立場にもある。我が家の家庭教育に公教育はどう関与しているのだろうか。いくら考えても、どちらももやもやしていてすっきりしないのである。子どもの立場に立てば、「公」も「私（家庭）」も渾然とまざりあって、子どもの一日が過ぎていき、その中で自分なりの生き方を学びとっているのであって、「公」と「私」の線引きなどできないと思うのである。そんなことをしょっぱなか

ら言ってしまったらそれで終わってしまう。子どもに影響をもたらす「公」「私」の境界線ははっきりしなくとも、大人の立場に立てば直接担当する時間枠は確かにあるわけなので、家庭の時間枠にスポットをあてて、つまり、我が家の家庭での生活を通して感じていることを述べて、自分が「公」の場で大切にしたいと思っていることを書いてみることにする。それは、ちょっとテーマとはピントがずれるが、「私」をふまえたうえで今、「公」に求められていることもつながっていくと思うのだが、いかがなものだろうか。

今は、春休み。母親の仕事先の幼稚園も休みに入り、我が家では、いつもの緊張感から解放され、のんびりと時を過ごしている。我が家は、出版社に勤務する夫と、今度小学校二年生になる長女、そして三歳になったばかりの長男の四人家族である。明日は、母親の仕事がないというだけで、こんなに精神的にも、時間的にもゆとりを持つことができるものなのだ。それにつけ、普段の毎日の余裕のなさを思い知る。惨憺たる我が家の通常の一日を思いおこして見る。

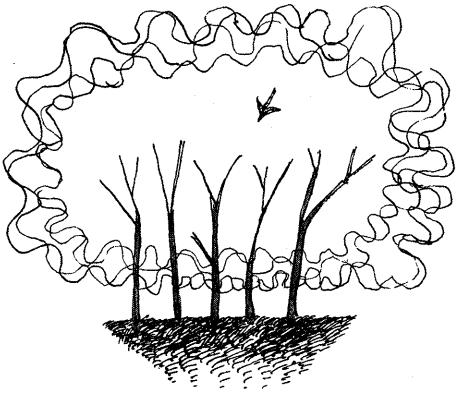
朝、五時半起床。タイマーつきの全自動洗濯機の中で、洗濯物がスタンバイしている。何はともあれ、洗濯物を干す。つぎに朝食と弁当づくり。七時、家族を起こす。それと同時に一足先に朝食をとり、七時半、家族を残し私は仕事に向かう。残された三人で朝食。八時、娘が学校に向かう。父親は、朝食の片づけとふとんたたみ。息子はその間テレビ観賞。登園と出社準備。八時五〇分、自転車にのって、保育園へ出発。息子の長い長い保育園での一日が始まる。迎えのタイムリミットである六時半まで、目一杯保育園にお世話になる。一方、娘は、放課後は、学内にある学童保育に。五時半すぎ、学童

から帰宅。母親と弟が帰宅するまで、約一時間一人で留守番。六時四十五分すぎ、母親帰宅。休む間もなく夕食準備。七時半すぎ、夕食開始。八時頃、夕食完了。一息ついて、夕食片づけ。入浴。九時すぎ、子どもたちを寝かしつける。ざっと我が家の毎日は慌ただしくかように過ぎていく。

ありがたいことに、朝は、夫の仕事が比較的自由がきいて出社時間が遅くていいので、私は時間がくれば一人でオサラバと出ていけばいいので気楽であるが、夫の朝のプレッシャーは大変なものだと思う。一方、私は、家に帰ってからが、まさに時間との闘いなのだ。そうなるとこちらのペースで事を進めるので精一杯になってしまう。子どもは放ったらかしで、テレビなど適当に見させておいて、夕食準備にとりかかる。準備ができた時点で、「ご飯よ。早く仕度の手伝いをしなさい」と急きたてる。子どもはそう簡単には行動を転換できないでぐずぐずしていると、無理もないことがわかっていながら、イライラがつのり、「早くしなさい」と語調が荒くなる。食卓についてからも、言葉少なに黙々と食べ、子どもたちを食べることに専念させることばかりに気が向いてしまう。ある時、ハッとしたことがある。当然知っていると思っていた食卓を飾る食べ物の名前を娘が知らなかった。忙しくても夕食は手づくりで栄養のバランスのとれたものをと、精一杯努力して作ってきたが、作るばかりに気をとられ、作った後のことが抜け落ちていた。「食べる」ということは、ただ栄養を摂取できればそれでいいのではなくって、その食べ物の名前を知り、その中の素材の歯ざわりや味を充分かみしめてはじめて「食べた」ことになるのだと思う。「これ、○○を煮たの。食べてみて」「この○○おいしいでしょう」「これ食べると、シャキシャキ言うね」そんな会話を楽しみながら食事をするゆとりがなく、折角心をこめ

て作ったものなのに、機械的に、無味乾燥に食べてきたことを多いに反省した。次々とこなさなければいけない事柄に気をとられ、我が子と共に過ごせる限られた貴重な時なのに、その時を充分に共に楽しむ余裕が悲しいかな、ないのだ。時間的制約という厳然たる事実もあるが、それだけが原因ではない。ちょっとした気持ちの持ちようで、時の過ごし方が変わってくると思う。少しでも早くと黙々と食べるのと、食べ物の話や、今日一日のことを話しながら食べるのと、食べ終わり時間がどれほどちがうだろうか。そんなにちがいはしないはずである。

母親が働きながら子育てをしている家庭では、我が家と似たりよったりの日を送っているのではないだろうか。母親が仕事をしてない家庭でも、私の幼稚園に通っている親子の退園後の生活を垣間みると、絵画教室、音楽教育、プール、体操教室、公文などなどかなり忙しい生活を送っているようだ。子育てにまつわる情報が氾濫し、教育産業も盛んな今、何もさせずに幼児期を過ごさせることを選択するには、親としてかなり勇気がいることだと思う。かくして、今日はどこどこ、明日はどこどこと連れまわす。〇〇教室には、開始時間と終了時間があ



り、ゆっくり過ぎる子どもの「時」に、否応なしに制約をもたらす。親の方もその制約に縛られて、子どもを急きたてる。「早くしなさい。遅刻しちゃうじゃない。もーう、いつもあなたはぐずぐずしているんだから――」。どうにか時間に間にあって、親としては、ホッと一息。子どもとの貴重な時を人まかせにしておいて、なんて自分は教育熱心で、子ども思いの親なんだと自己満足。夕方、バタバタと忙しく家に帰り、子どもは放ったらかしで、夕食の準備やら家事に追われる。こんな実態が、どこの家庭でも繰り広げられているのではないだろうか。

慌ただしく過ごしていないと現代社会の流れから取り残されてしまうような強迫感に、大人の生活は蝕まれている。そのペースに否応なく子どもが巻きこまれていく。食事をつくったり、片づけたりといった煩雑なあたりまえの日常生活から子どもを排除するかたちで大人のペースを保ったり、ゆったりとした子どもの時を親の都合で切りきざんだり……。

食事の準備をしたり、食べたり、着換えたり、片づけたり、いっしょにくつろいだり、お風呂に入ったり、寝たりする日常のありふれた生活の中で、子どもと共に時を楽しんだり、子どものちょっとしたふるまいに感心したり、子どもの目の輝きに感動したり、そういったことが、何かいつもせわしく追われているような現代生活においては、とてもむずかしくなっている。本来、毎日同じように展開されるありふれた生活の中に、無理じいをするのではなく、子どもを巻きこんで、親と子が共に生き生活をつくりだしていくのが「家庭」であり、その中で、子どもが自然と身につけていくことが「家庭教育」なのだと思う。人まかせにするのではなく、ありふれた当たり前の生活を親子で大事につくりあげていくことが、今一番心がけていかなくてはいけないことではないだろうか。

私の幼稚園の保護者会の時に、あるお母さんがこう話してくれた。

「幼稚園から帰る時、別に急く必要もないので、この頃、バスに乗らずに、娘と二人のんびり歩いて帰るんです。すると、こんな所にこんなきれいな木があったとか、何日か前には色づいていなかった葉っぱが気がついたらいつの間にか色づいていたり、色々な発見があるんです。ゆっくりとそういう色々な発見を楽しみながら、娘とおしゃべりをして帰るんです。」

ありふれた日常生活の中で、子どもと向きあい、子どもといっしょにいられる時を楽しもうとして親の真摯な姿が伝わってくる。

公教育においても、子どもたちと共に生き生活する姿勢を持ち続けることが、一番大変なことである。楽しいことも、困ったことも、その全体を受けいれながら、子どもたちとの生活を楽しめたらどんなにいいだろう。「公」「私」にわたって、こうあってほしいという気持ちが強く、どうしても子どもにそれを押しつけてしまいがちな自分を思い知らされ、昨年度一年は悶々としていることも多かった。今もその自分自身の課題を乗りこえられた状態とは言いがたいが、前向きに、子どものありのままを受け入れ、子どもの求めているものをかえしていく努力をしていきたいと思う。そうすることで、子どもと共にあたり前の生活を精一杯生きようとする保護者を支えることができたら、と思っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

ある日の育児日記から (31)

佐藤　和代

有は一歳一か月、体重10キロ。まだ歩けないのにしっかり重くて、外出するには今が一番大変なときかな、と思います。

どこへ行くにもオムツや着替えが必要ですから背中にリュック、前（だっこひも）に有、右手に圭、左手に紙袋、といういでたちが普通。これでは動作はどうしてもスローモーです。バスに乗るときなどモタモタして、運転手さんに叱られたりして。急いでいるのはわかるけど、こっちだって大変なのに…。

もちろん、親切な人もいます。圭が電車とホームの間に片足をいれてしまったときは、後にいた人が、親より先に抱きあげてくれました。レストランで、私が食べている間中、有をあやしてもらったことも。そうやって手助けしてくださるのは、たいてい年配の女性。きっと、経験があるのでしょうね。私も以前に比べると、赤ちゃんをかかえて困っている人がいれば、声をかけられるようになりましたから。とかく批判の多い〝オバサン〟ですけど、最近私は、オバサン尊敬！　です。

あ、でも、駅の階段でベビーカーと子どもをかかえていたら、どうか、ベビーカーのほうを持って下さい。子どもを抱かれると、泣きます…。

若いお母さんたちへ

弱い母親

杉本　裕子

家のなかに大人は私一人。そして幼い子供達が遊んでいる。ふと目を窓の外にやると、どこからか得体の知れない地鳴りのような音が響いてくる気がする。一体なんだろうと不安になり、まとわりついてくる子供に応えるのも気もそぞろに、窓の外ばかりが気になる。ときどき私は自分が今そんなふうになっているような気がする。家事と育児におわれて、日常の些細なことばかりにかかずらい、社会のことや世界の動きといったことが全然わかっていないのではないだろうか。だいたい新聞を読む時間さえなくて、政治・経済・国際情勢など、ちんぷんかんぷんなのだから。こんなことではいけないと不安に苛立ち焦りはじめると、もうことはどんどん悪くなっていく。

母親として私がしている仕事は、実際に身体を動かしたり目に見えるというところでは本当に小さなことばかりだ。おんぶして重い荷物をもった

り、だっこして駆けあがったりということはあるにしても、小さい子供を相手にしていることだから、私の動き方だって子供が目をまわさないくらいのものなのだ。ただその小さいことがずっと連なっている。綿々と一日中。日曜・祭日なく。ところが一度何かの理由で苛々しはじめると、この繊細なことの連なりがあっという間に崩れていってしまう。子供に服を着替えさせる手つきも荒々しくなり、応える言葉や目つきも険しく凄味を持ち、子供は私におびえて泣き叫び、細い糸で編んでいたものがあれよあれよという間にほつれていくように、もうどうしようもない。そんなときはがっかりして、もう一度やり直す気になるまでずいぶん時間がかかる。

こういうことを繰り返しながらやってきているうちに、長男は幼稚園の時代を終え、春から一年生になる。あんなにしょっちゅう私のいらだちの波に襲われて、この人の幼児の時代はじゅうぶん幸せなものだったろうか。私はくびをうなだれて、子供に「ごめんね」と謝らずにはいられない。でも、何度となく悔やみながら、子供の心に傷を負わせてきたことに自分もまた傷みながら、何か、どこかで私は考え違いをしていたのではないだろうかと思いはじめている。母親ってこんなにしんどいことなのだろうか。自分に無理をして疲れ果て、また気をとりなおしてはまた転び、そうこうしているうちに子供はどんどん大きくなっていってしまう。何だか、私はこの子供の母親になったときから受け取れるはずだった喜びの大半を、指の間からこぼしてきてしまったような気がする。

窓の外のことが気になりだすと、正体不明のものに不安にさせられてしまう。今幼い子供を育てていると、テレビからラジオから、雑誌の記事か

らも、もちろん育児や教育関係の本からも、さらにはダイレクトメールでまでも、親としてしなければいけないこととその方法についてが、有無を言わさず洪水のように浴びせかけられる。進級・進学の季節にはそれがひときわ力を増すようで、これが社会の現実ですよ、いつまでも親子で家のなかでぬくぬくとはしていられませんよ、という声の多さにこちらはまったく呆然とする。

でも、実際にその現実社会のまんなかで仕事をし、心身ともに消耗して帰ってきた夫が、やっとたどりついた家で子供達の様子をみて安心するのだ。「みんな元気いっぱいでいいね。大切なことだよ」と。すると私は、もしかしたら子供の生活にこそしっかり目を向けていって良いのではないかと思う。政治・経済の動向や社会の情勢は私達を巻き込み、どこかに連れ去る大きなうねりのように思える。でも毎日私の目の前で起きている子供の育ちには、深く豊かな人間性の体験がこめられているにちがいない。

母親としてであれ、保育者としてであれ、子供と共にある生き方を選びとるとしたらそれはなぜか。理想的な母親や保育者になるべく自分を研き、そして理想的な社会人を我が手で育てあげたいと思うからだろうか。違う、それは本当はもっと暖かいこと、大地の中から作物の実りを収穫し味わって食するというような、自然の恵みを受けるにも等しいことなのではないだろうか。

こどもって不思議だしおもしろい。ときどき、子供がしていることの内側までちらっと感じられることがあると、こどもってすごいんだなぁと感嘆してしまう。私はこの驚きをこそ毎日連ねていけたらいいのにと思う。でも主婦として、日々の家族の生活をささえていく営みは実際煩雑で、また別の神経をも使っていかねばならない。子供に

ゆっくり感心している余裕もなかなかないのだ。それにただのか弱い一人の人間にすぎない私は、簡単に得体の知れない不安や苛立ちに飲み込まれてしまう。子供と共にいることで豊かで深い人間性の体験をするということが、いつでも誰にでもわかりやすいことなのであれば、母親であることにいつも前向きでいられるのに。しかしそれが自明のことでないのは、ただ子供と一緒にいればやってくるというものではなくて、子供の傍にいる大人が様々な配慮や支えを提供し、子供とできるだけお互いの本当のところでコミュニケートしていく中で創りだされる体験なのだろうと思う。子供と一緒にいて満ち足りているときには、きっとそれが意識しないうちにもできているときなのだろう。だからそういう体験の丸ごとを掘り起こし、大人である私にも理解し、認識できる言葉に翻訳してみたい。そうしたら子供といっしょのこの毎日の生活のなかから、世界中の文化遺産にも相当して余りある、富と智恵が日々生まれていることが実感できるだろう。ただ、小さな編目をひとつひとつ必死で連ねていっている最中に深い省察をするのは難しい。だから本や何かの文章で、

また幼稚園の先生の言葉などから、それを伝えてもらえたとき、私はしみじみとうれしくなる。そして、あぁ、こういうことをひとつひとつしっかり蓄えていけば、外の地鳴りの正体だってわかってくるなと思うのだ。

それからもうひとつ、子供と一緒にいてイライラの種になることが、子供の評価ということだ。この子供が生まれてきたときにはもうそのままで充分だと思い、心からこの子を喜んでいたのに、いつからかどうだこうだと批評し始める。子供が自分で自分のことを評価し始めるのはいつ頃からだろうか。うちの子供達を見ていると、三歳頃からまわりにいる大人たちが自分のことをどう言っているかに気がつき始め、自分のなかに取り込んでいくようだ。ただそれは大人にも気が付きやすいところでのことで、そういうことは胎児の頃から既にあるという。安易な評価の結果、また相手を評価しようとする姿勢は、意外に深く心に傷を残すことになるのではないだろうか。

末の子が一か月健診の時、体重のふえ方が少ないということで、母子手帳に「栄養不良」というはんこを押され、母乳にこだわりすぎてはいけないと指導された。一歳一〇か月の今充分健康だし、あの時でさえ毎日一緒にいて特別心配はしていなかった。それなのに今でもあの時はんこを押した看護婦さんの言葉や態度に私はこだわっている。思い出すと胸がチクリと傷むのだ。

長男は幼稚園でも間接的な表現ではあったけれど、「このままじゃ、ダメですよ」といわれたような気がする。卒園の時点で、まだひらがながほとんど書けなかったからだ。たしかに幼稚園の先生が心配してくださったように、小学校では子供のペースなどにはおかまいなく、こなしていかね

ばならない課題がつぎつぎと負わされていくことだろうから、「このままじゃ」本当に心配だ。そういう本音を持ちながら、「あなたは今のままでいいのよ」なんて言ってもすぐばれる。長男はきっと私の心配を感じとっている。

子供の今のありのままを認めようということは、私も耳にしてきたけれど、そこから始めないと子供が安心していられないからという、単なるスタートラインの立ち方としてであったり、「うん、そのままでいいのよ、でもその次にはね、……」と、実は心のどこかに「でも」を隠しもっていたりしていて、この子が本当にこのままで素晴らしいのだとは思えないことが多い。子供の身長や体重を測るのと同じように、色々な物差しをもっときては子供を測り、評価することをやめられない。でもふと我に返ってみると、おや、私は何をしているのだろう？　同じ年ごろの子供達のなかで、もじもじしていておっとりしていて、何をやっても上手にできないとしても、それだからと言ってこのこどもに×をつけるのは誰だろう？この人が今こうしてあることは、いわば現在進行中の歴史のようなものであって、誰一人として同じ道筋をたどることがないとすれば、私は何をもって測ろうとしていたのだろう？

長男が幼稚園で友達のなかになかなか溶けこめず、いつも一人でまわりを眺めてばかりいることが私にはいたたまれなくて、どうしてこんなふうなのだろう？　私の育て方のどこがいけなかったのだろう？　などとくよくよしていたとき、私の愚痴を聞いたある人が、「それは彼にとっての財産だよ、本当に。持とうと思っても持てないものなんだよ。」といってくれた。その一言で私の気持ちはどんなに救われたことだろう。この子供のあり方そのものが、他にはない財産だという。そ

の人は自分も子供の時同じようだったからわかるのだという。この子の今の在り方をそのまま大切にしていっていいのだと、母親たちはどんなに信じたいことだろうか。

評価すること・されることと無縁ではいられない社会のなかで生活していくのだから、それらを無視していこうとしても仕方がない。でもそのことで無用に傷つかないように、また誰かを傷つけないようにしたいと思う。

母親になると、一人の人の命を身体ごと委ねられる。この命は世界中で今までにあったことがなく、またこれからもあらわれることのないたったひとつの存在で、それがどんなふうに芽をもたげ、どんな具合に枝葉を広げ、どんなに美しい花を咲かせ、かぐわしい実を実らせるのか、誰も知らない。この命に水をやり、陽をあてるよう頼まれている父親と母親にさえわからない。そう考えると、命を育てることと評価するということはずいぶん違う仕事だと思う。それなのにこの社会ではそのふたつのことがとても近くにある。まるで密接な関わりがあるかのような錯覚をもってしまうけれど、目指していることは違うことが多いのではないだろうか。

母は強しなどといわれるけれど、本当は我ながらなんて弱いのだろうと思う。子供のことを「いい子だ、いい子だ」と毎日喜んでいられる単純な心さえ持てたら、他には何もいらないとさえ思ってしまう。

（はるにれの会）

一学期も、もうしめくくりの時、春に植えたアサガオやひまわりも、花の咲く前に夏休みに入ってしまいそうです。ちょうど花の時期に、長い夏休みに入るため、幼稚園で、アサガオのジュースを作って遊ぶことはあまりできないことなのですね。

今月号では、浅山英一先生に「今からまいて夏休みに咲かせるアサガオ」を書いていただきました。毎日、お日様のしずむ時間を気にしながら、子どもをねかしつけるようにダンボールをかぶせる。水や栄養を与えるだけでなく、休ませることも必要なのです。植物はたねをまいて、水をやりさえすれば、自然に育っていくことが多いので、あまり意識しないのですが、〝育てる〟ことの大事な部分を、お日様や自然がやってくれているのです。五月にたねをまかなかった方、又、夏休みにお家でもアサガオの花を楽しみたい方、お子さんと一緒に育ててみてはいかがでしょうか。

＊

「公教育は家庭教育に…」のシリーズ、タイトルが堅いわりには、子育ての本音の部分を書いていただいています。今月の伊集院先生の原稿を読んで、十年前の我家の日常を思い出してしまいました。夕食の仕度の時間はテレビのお世話になり、食事は、栄養素を食べているような生活でした。学生時代とても優秀だった友人が、子育てにはまよい、髪ふりみだして奮闘していたりする話をきいて、皆、同じなんだな、といくらか気をとり直したり…、というような毎日でした。

まわりからいくら助言されても、髪ふりみだしたまっただ中の母親には、素直に入っていかない、というのが現実でしょう。幼稚園や学校の先生方は、たくさんの子どもや親達と接している立場で、そんな悩める母親達の気持ちもわかってあげ、気長に子育ての助言ができれば…、と思います。子どもを思う気持ちに変わりはないのですから。　（K）

幼児の教育　第九十二巻　第七号
（一九九三年七月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

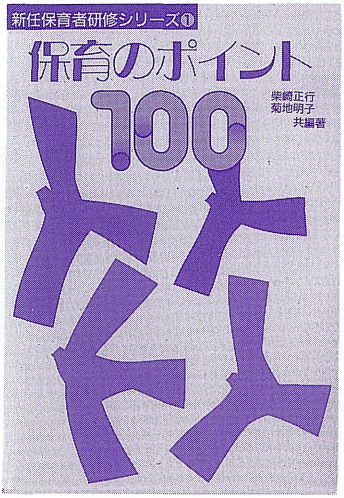
平成五年七月一日　発行
編集兼発行人　本田和子
発行所　日本幼稚園協会
東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
東京都文京区本駒込六―一四―九
振替口座　東京九―一九六四〇
電話〇三―五三九五―六六〇四

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。
●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

新任保育者研修シリーズ①

保育のポイント100

柴崎　正行
菊地　明子
編著



新任保育者がさまざまな保育の問題点に出会った場合、保育への取り組み方のポイントが分かる。

A5変型判

232頁

定価2,400円(税込)

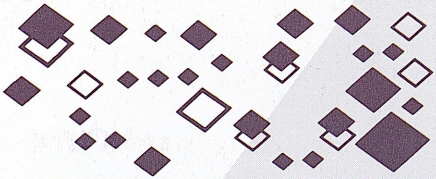
新任保育者時代に直面する、保育への期待と不安が入り交じった気持ちを整理してくれます。保育の各々の分野のエキスパートの方々が、問題点の要点整理を示していて、新任保育者が問題点に出会った時の保育のポイントが分かります。新しい保育への共通理解を図るポイントが確認でき、園内や地域の勉強会や研修会の参考資料に役立ちます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

子どもに生きた人・倉橋惣三

ーその生涯・思想・保育・教育ー



幼児教育の偉大な先駆者・倉橋惣三の生涯、思想、理論、著作資料などすべてを紹介する。

今なお大きな影響力を持つ倉橋惣三の保育思想を、すべての著作と周辺の人たちの証言によって説きあかし、これからの日本の保育の在り方を示す。倉橋惣三研究の決定版。

森上史朗・著

A5判　488頁　定価3,800円(税込)

倉橋惣三選集　全4巻

上製本各巻ケース付き

わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読み、語り継がれて保育者にとっての座右の書。

①幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル
B6判　416頁　定価2,300円(税込)

②幼稚園雑草
B6判　448頁　定価3,000円(税込)

③育ての心・就学前の教育他
B6判　472頁　定価3,000円(税込)

④保育案他
B6判　456頁　定価3,000円(税込)

生活をつくる子どもたち 倉橋惣三理論再考

倉橋理論実践園の保育を調査研究し、子どもの生活、発達、就学後の成績、母親へのアンケートなどから、この理論の重要性を改めて実証した労作の書。

飯島婦佐子・著

A5判　244頁　定価1,700円(税込)

倉橋惣三「保育法」講義録 ー保育の原点を探るー

昭和10年、倉橋惣三が最も円熟した時に行った保育法の講義録です。これからの子ども主体の保育への数々の提言がもりこまれ、幼稚園真諦他の著作と対照し、理解の助けとする脚注付です。新幼稚園教育要領と関連する箇所も示され、現代の保育にとっての倉橋理論の意義を論ずる津守真先生の序文つき。

菊池ふじの・監修　土屋とく・編

B6判　256頁　定価1,500円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館